デイゲニス・アクリティス（E版）
― 太守の歌 ―（その一）

橘　孝司　訳

【これまでのあらすじ】

シリアのある町の太守が、中世ローマ帝国のカッパドキアの町を襲い、将軍の娘を捕囚にして連れ去る。将軍は追放の身であり、娘の兄たちも辺境地にいて、不在だった。母からの悲痛な手紙で事を知った兄たちは、妹の奪還に向かう。

彼らは数日のうち、険しい隘路で太守の部隊に追いつくと、富を差し出す代わりに、妹を返してくれるよう、太守に懇願する。

これに対し、武勇を誇る太守は、兄弟の誰かが一騎打ちで自分を打ち負かすならば娘を返そう、と提案する。

兄弟は籤で戦う者を決めようとするが、籤が当たったのは末弟のコンスタンティノス。

兄たちは決闘に臨む弟に助言を与える。

【コンスタンティノスと太守の戦い】

「轟音と打撃と脅威に怯えることなかれ。

母の呪いよりも死を恐れるな。

心すべきは母の呪い、傷や痛みなどではない。

*その身が切り刻まれようとも、恥ずべき所業に走ることなかれ。　四

我ら五人が殺されるなら、奴らはあの娘を奪い去るがよい。

嬉々として太守（*エミール）の剛胆に当たり行け。　七

お前の両手に気をつけよ、神の御加護のあらんことを」

太守は馬を走らせ、彼（コンスタンスティノス）の方へとやって来る。

乗っているのは、鹿子斑（かのこまだら）の星もつ*駻馬（かんば）、　一〇

その額には黄金の星を戴く。

四つの蹄（ひづめ）は銀に塗られ、

蹄鉄の釘もまた銀造り。

その尾は*没薬（もつやく）が塗られ、真珠に飾られる。

鞍の後ろでは緑と薔薇色の*鷲が、

臀部を陽の光から覆う。　一五

*青と金色の槍をしごきながら、

さて太守はこう語る。

「数々の戦と試練を知る私が、

ここでも勝利を得るはず」　二〇
　サラセン人がお*国言葉で太守に声をかけ、
「あやつを、太守よ、あざ笑ったり、詰(なじ)ったりしてはなりませぬ。
小わっぱめ、なかなかの戦上手と見えまする。
*小僧めにすばやく馬首を廻す心があれば、
私の見るところ、その剛勇により、　二五
妹と我らの分捕品を取り戻されることになりましょう」
［すぐさま両者は馬を駆り、平原へと降りていく。］
　この者の妬み心は、太守を怖じ気づかせようとはやり、
「あやつは犬のローマ人、ひどい目に遭わされることのなきように」
　サラセン人はお国言葉で太守に声をかけ、　三〇
「*御館様(ムーレ)、小僧をつかまえなされ。すぐに勝利しましょうぞ」
　直ちに両者は馬を駆り、平原へと降りていく。
ともに竜のごとく息を吐き、獅子のごとく咆哮し、
鷲のごとく飛びながら絡み合う。
そして見よ、見事な勇者の戦さを。　三五
激しく闘い、素早く打ち合い、
打撃と攻めぎ合いの凄まじさに、
平野は恐怖し、山々は打ち震え、
樹々は根こそぎ倒れ、陽は闇に隠れる。
血は鐙(あぶみ)と手綱を流れ落ち、　四〇
汗は甲冑の上を滴った。
　だが、機敏だったのはコンスタンティノスの黒馬の方、
その騎手は驚くべき若者だった。
太守に向かって襲いかかり、棍棒をうちつける。
すると、太守は震えて逃れようとした。　四五
　サラセン人はお国言葉で太守に声をかけ、
「御館様(ムーレ)、小僧をつかまえなされ。すぐに勝利しましょうぞ。
小僧の敏捷さに首を取られないように。
貴方を倒そうとばかりに、そ奴は見事に攻めたてている。
どうも貴方には倒せそうにありませぬ。　五〇
軍団を撃破したなどと、そ奴に誇られることのなきように！」

【太守の敗北】

　太守はこれを聞くと、遠くへ逃れて
槍を投げ捨て、相*手を指さす。

その指でもって、こう言う。
「幸いあれ、若武者よ。勝利はお前のもの」　五五
言い終わらぬうちに恥じて逃げ出すと、
末弟コンスタンティノスも兄のもとへと引きあげる。
五人の兄弟は馬に乗り、太守の所へ行った。
「太守よ、シリアの第一の太守よ、
神の僕よ、約束を守っていただきたい。　六〇
我らの妹に会わせてもらおう、我らの魂が喜ぶために」

【乙女の捜索】

そこで、太守は怒り*猛って言う、
「我が軍隊のところへ行き、どの天幕でも探すがよい。
妹を見つけたなら、ただちに貴公らに与えよう」
そこで、五人の兄弟は天幕を探し、　六五
探したものの見つけられず、再び涙にかきくれる。
天幕の外でサラセン人に出会い、
たいそう嘆きながら、話*しかけた。
「殿ばらよ、貴公らが探しているのは、嫁入り前の乙女、
あの素晴らしいローマの娘ではないのか？　七十
坂を上り小川へ行きなされ。
わしらは昨日その場所で、甘美な娘たちを屠ったのだ、
言うことを聞こうとしないので」
殿がたはそれを聞いて大いに嘆き、
長らく考えに沈んでしまった。　七五
随分経って我に返り、
涙を拭い、手綱を返すと、
進んで行き、教わった小川を見つけた。
そこで見たのは血の中に転がる乙女たち、
ある者は手を失い、別の者は頭が欠け、　八〇
剣で切り裂かれて、血の中に転がっていた。
彼らは手を伸ばして、頭をとり上げては、
顔を見ながら、妹を見つけようとする。
全てを調べ、立ち止まっては見るのだが、
妹を見分けることがついぞ出来ない。　八五
*大地から土を取って、頭にふりかけた。
娘たちは折り重なって、血の中に転がっているのだ。
思いもよらぬ、その無法ぶりを目にして、
悲嘆に沈み、座りこんでむせび泣き、

涙ながらにヘリオスに嘆願する。　九〇
「ヘリオス*様、どうすれば妹が見つかるのでしょう。
どうやって彼女を見分け、葬ってやれるのでしょうか。
哀れな母に、どんな知らせをもっていくべきなのか。
ヘリオス様、これは何という酷い仕打ち！
これより先、この世に生きながらえたとて何になろう。九五
我らがこの世で戦っている間に、復讐が他の者に向けられるとは。
大地よ、激しく嘆き、この様を悲しんでおくれ。
我らの妹を虐る恐るべき光景を汝は目にしたはず。
それとも、陽より生まれし乙女は捕囚となったのか？
奴*らは多くの乙女を殺し、犠牲に捧げたのだ、　一〇〇
トルコの寺院、大きな社で。　一〇一
キリストは天からこの世に降り来たると、
無法と汚れた犠牲とを追い払い、
この世によき死を示されたというのに。　一〇五
奴らはお前の魂を追い出すだけでは飽き足らず、
お前の美を切り裂き、見分けがつかぬようにした。
妹よ、この通り、我らの前に身体はあるが、
お前の姿をしていないとは。何という無法！
しかし魂が去るならば、姿もまた失われる。　一一〇
ああ、我がよき妹よ、その姿を目にできないとは！
お前の魂は出て行き、美貌もまた失われた。
犬めがお前を殺し、お前の美を奪った。
卑劣、残酷！夷狄の粗暴さ！
哀れなお前は何という無法な仕打ちを受けたのか！　一一五
お前の血が流れるのを、神は天から御覧にならぬのか？
そして、寛大にもお前はこの無法に耐えたのか？
妹よ、兄たちの嘆きを受け取れ。
汚れなき至福の人よ、我らの涙の泉を受け取れ。
お前はただ一人の妹、大いなる慰めだった。　一二〇
思うにお前は死んでしまったのだろう。主よ、汝に栄光あれ、
娘よ、お前は純潔をまもったのだから」
　そして耐えられず、妹のために泣きながら、
念入りに探すのだが、見つけられない。
共同の墓を建て、全ての娘を葬り、　一二五
悪しき心で太守のもとへとって返した。
五人は鞘(さや)を払って剣を抜き、

太守に面と向かってこう語る。

【太守と兄弟たちの対話】

「太守よ、第一の太守よ、シリアの犬よ、
貴様は妹を拐かしたが、奪ったなどと考えるな。　一三〇
妹に会わせるか、さもなくば貴様も切って捨てよう」
　太守は彼らを見て大いに恐れ、
少し間をおき、彼らに尋ねる。「貴公らは何者、いずこの出か？
ロマニアの、どの一族なのか？」
　そこで長兄はこう答える。　一三五
「我らは大いなる一族の出自、
父は*ドゥーカス家の出、
母は*キルマガストリの一族。
伯父が十二人に、従兄弟が六人。
我が父は軍の反乱のかどで追放された。　一四〇
一族に見つかれば、貴様はシリアをその目に出来ぬ。
母はここにいる五人を産んだ。
我らには、陽から産まれし妹がただ一人きり、
それゆえ我らの武勲はあの娘の喜びであった」　一四四

　*そこで太守はこう答える。　一四八
「我が父は*アーロン、伯父は*カロエレス、　一四五
音に聞こえた*ムセロムこそ、我が父の父。
皆、かの預言者の墓に葬られている。　一四七
将軍も*総督も私に対抗できた者はいない。　一四九
ペルシャとローマの軍隊を打ち破り、
語り尽くせぬ数の城をこの手にし、　一五〇
ペルシャの支配者や将軍どもを捕らえてきた。
貴公らに受けた屈辱は決して忘れまい。
戦さにて偉業を成し始めてより、
何人たりとも、私に追いつき、　一五五
戦って、戦利品を奪う者などいなかった。
　なのに貴公らに受けたこの事、これを決して忘れまい。
私は軍隊と一族とに恥をかかせてしまった。
命はいらぬ、今日にも死んでしまいたいもの。
　だが、しゃべらせて欲しいことは山ほどある。　一六〇
ここで本当のことをすっかり明らかにしよう。
もし許されるならば、私を義弟にしてはもらえぬか。
貴公らの妹はこの私の許にいる。嘆くことはない。

そして誓って言うが、良き預言者にかけて
偉大なるマホメットにかけて
*娘は私に接吻を与えず、私も言葉をかけてはおらぬ。
貴公ら五人を夜昼となく待ちわびている。
それゆえ私は彼女を隠し、貴公らを欺いた。
私の天幕へ行くがよい。妹を見つけることだろう。
*無法なアラビア人は他にも多くの乙女を捕らえ、
無法不正にも、売り飛ばしたり、殺したりした。
貴公らの妹は私のものとなったが、
その見事な美のために、彼女を庇護してやった。
行って、汚れなき乙女を受け取るがよい。
　彼女の美とやんごとない身分のゆえに、
私は信仰と多くの栄光を捨てるつもりだ。
そしてキリスト教徒となり、貴公らとともに参ろう」

【妹との再会】

　そこで、五人は天幕へ行き、
*沈香造りの美しい寝台を見つける。
上には黄金の布団、その上には乙女が横たわる。

一六五
一七〇
一七五
一八〇

そこに座す華奢な姿はまるでやつれた林檎、
泣き嘆き、兄たちを求めていた。
たとえしおれようとも、陽のように輝き、
そのまことの美しさは陽の光を思わせた。
驚くべき乙女の美はやつれていた。
何という不幸な光景、無法の業よ！
　兄たちはやつれた妹を目にすると、
五人一緒に嘆いてこう言う。
「起きなさい、華奢な人、我らの甘き妹よ。
お前は剣に刻まれて、死んだものと思っていたのに。
神はお前を美のゆえに庇護された。
お前の顔（かんばせ）の花は悲嘆にやつれてしまった。
お前への愛のためならば、我らは戦さも恐れない」
　五人は夢中で乙女に接吻する、
ある者は唇に、別の者は目に。

【太守の出奔】

　五人の兄弟と太守は腰を下ろし、
彼を義弟とし、

一八五
一九〇
一九五

ロマニアへ向かうことに同意する。
ただちに太守は命じて、驚くべき若武者のうち、
寵愛するものを手元に残し、　二〇〇
他の者は任を解き、シリアへと送り返した。
　太守は娘とともに出立し、
義兄たちとともに、ロマニアへと向かう。　二〇三／二〇四
前には若武者、太守は後ろを行き、　二〇五
乙女は輿の中にいて、五頭の騾馬がこれを運び、
周りを五人兄弟が護衛する。
　全*ての民がこの大いなる喜びを目にして、
感嘆しながら娘の後をついて行く。
彼らが目にした捕囚は　二一〇
乙女への愛の力で解放された者たち。
かつて彼女を救おうと皆は叫んだ、「主よ憐れみたまえ」と。
そしていまでは誰もが知っている、
麗しの乙女がその美ゆえに、
十万もの軍団を打ち負かし、
シリア第一の太守の心を変えたことを。　二一五
　かくして二人は婚礼を挙げ、喜びを分かち合う。
そして陽より生まれし娘と閨（ねや）をともにし、
驚くべき子、ディゲニス・アクリティスが誕生した。
この子は輝く暁の星、輝く太陽、
あらゆる被造物の中で輝き続ける光、
山賊（*アベラティス）や勇者の中にあっても強き人。　二二〇
生まれて育ち、四歳になるや、
一*族の剛勇を学び始めた。

【太守の母の手紙】

［*ずっと後になって］　二二五
母親はシリアから、
嘆きと非難と悲嘆に満ちた手紙を送った。
「愛するわが子よ、わが魂、わが吐息よ。
なぜお前は我が目を闇にし、お前自身を見失ったのか。
お前は一族をシリア中の汚辱とした。　二三〇
村人は生涯ずっと我らを咎めるだろう。
バグダッド*やバス*ラの城に娘はいない、と言うのか？
あのバビ*ロンにだって、日輪の光に負けない　二三二／二三三

娘がいないだろうか？　二三五
*ハラブの高貴な姫たち、日輪のように輝き、
麝香の漂う彼女らを覚えていないのか？
我が子よ、お前の愛した娘たちを忘れてしまったのか。
あの娘たちは胸を打ち、慰められるものもない。
我が子よ、驚くべきお前の子供たちを忘れてしまったのか。
この私を咎めだて、非難するのは、また
他の親族にすべての軍隊。
私が非難されているのは、我が子よ、お前のためなのだ。
聞くところでは、お前に子が出来たとか、シリアの竜が。
ああ何ということ、とんでもない。*カシシ人が知ったら、　二四五
ああ、*エメクとオラザヴロンで彼らがそれを聞きつけたら！
偉大なるマホメットの寺院を開き、
その墓で嘆き、お前を呪うかもしれぬ。
　*我が子よ、忘れてしまったのか、我ら二人が何をなしたかを。
そこから預言者の墓へ赴き、　二五〇
お前は礼拝して、私は祈ってあげたはず。
　名を上げ、大いに賞賛されようという時に、
お前は一族を捨て、全シリアを捨てた。
我が子よ、覚えていないのか、お前の祖父が何をなしたかを。
どれほどのローマ人を殺し、どれほどの奴隷を手に入れ、　二五五
*獄舎をローマの将軍で満たしたかを。
　我が子よ、覚えていないのか、お前の父が何をなしたかを。
*イコニオンから*アモリオンまでを蹂躙し、
*ニコメディアまで達し、*プライネトスを攻撃した。
海さえなければ、なおも進軍していたろう。　二六〇
私の兄、お前の伯父の*ムルスタシトも行軍し、
*ヘルモン河を突っ切り、*ジュゴスを占領した。
アルメニアを滅ぼし、多*くの悪事を働いた。
　我が子よ、覚えていないのか、お前の父が何をなしたかを。
どれほどの娘をシリアの城へ連れ帰ったかを。　二六五
　なのに、お前はローマ女への愛のため、　二六七
一族から離れ、高貴な朋友たちから離れ去った。
いかにして*豚喰らいの娘がお前を惑わし、
信仰と全シリアとを捨てさせたのか？　二七〇

奴隷であった女を、お前は奥方にして、　二七一／二七二
衣を脱がせて側に侍らせ、抱擁するとは。
　だが、わが子よ、私の祈りを受け入れるつもりなら、
お前には選り抜きの速き馬と　二七五
髭生えそろわぬ若武者たち、高貴なアラビア兵、
黄金の胸甲をつけた将兵五百人、
それにお前の父が身につけた黄金の胴鎧を送ってあげよう、
その鹿毛に乗り、胴鎧を着けよ。　二七九／二八〇
たとえ、駿馬が後を追っても、誰もお前に追いつけまい。
わが子よ、噂通り、娘を深く愛しているのなら、
彼女もともに連れてくるがよい。
すぐに帰って来なければ、
良き預言者、偉大なるマホメットに誓って、　二八五
お前の子供たちは殺され、この私も絞め殺されるだろう。
お前の麗しの姫たちは、他の男を抱擁することになろう。
すぐに帰って来ないなら、私はメッカ*の
預言者の墓に赴き、
頭を下げて、かつての祈りに代え、　二九〇
お前に親の祈りではなく、呪いのかかるよう祈ろう」

【この後、太守の母の手紙を携えた使者たちがロマニアへ向かう。母の嘆願に太守はどうこたえるのだろうか?】

【註】

五　写本は五行目に「我々五人が突進するならば」という不完全な半行がある。

七　「太守」αμιράς は作品中で固有名詞のように使われる。他には νεώτερος, νέος「若者」などと呼ばれるが、本名 Μουσούρος は七二三行に現れるのみ。

一〇　「星もつ」αστεράτον。馬の額には星形の模様があった。

一四　「没薬が塗られ」σμυρνωμένη。没薬（σμύρνα）は南アラビア産の高木ミルラ（balsamodendron myrra）からとれる樹脂。ミイラ製造の薫香料として用いられ、東方三博士のキリストへの贈り物でもあった。

一五　本物の鳥というよりも、鷲の刺繍のはいった布であろう（アレクシウ、ジェフリーズの解釈）。ディゲニスG版の別の箇所には「緑と薔薇色の絹織物を（馬の）尻に掛け、鞍を覆い、埃がつかないようにしていた」（四・二三七～八）とある。

一七　柄が青色で、穂先に金メッキがしてある槍。なおこの行は「ディゲニスG版」一・一六四と同一であり、原本に遡る古い箇所と考えられている。

二一　「お国ことばで」της γλώσσης。対応する「ディゲニス散文版（三

一九、二十一～三）」でははっきりと「サラセン人の言葉で」と記されている。

二四 このあたり写本が混乱しているらしい。リックスは「この者の妬み心は、太守を怖じ気づかせようとはやり」の一行を削除し、次のようにする。

「小僧めにすばやく馬首を廻す心があれば、
私の見るところ、その剛勇により、
妹と我らの分捕品を取り戻されることになりましょう。」
サラセン人はお国言葉で太守に声をかけ、
「御館様、小僧をつかまえなされ。すぐに勝利しましょうぞ。
あやつは犬のローマ人。ひどい目に遭わされることのなきように」

三一 原語 μούλε は他の作品には現れない。アラビア語 moula「（）主人様」とアレクシウはとる。

五三 指さすのは敗者が負けをみとめる所作らしい。

六二 写本は μαινόμενος「怒り狂って言葉を発す」。カロナロスやリックスはG版一、二〇八に基づいて ψευδόμενος「偽りの言葉を発する」と訂正する。

六八 「兄弟たちはサラセン人に話しかけた」が写本の読み。六九行以下はサラセン人の言葉であるから、兄弟たちの言葉は省かれていることになる。アレクシウ、カロナロスは「サラセン人は兄弟たちに話しかけた」と改訂し、読みやすくしている。

八六 「土」χούμαν を自分たちの頭にかけるのは、嘆きの表現。娘たちの埋葬は一二五行目でおこなわれており、「娘たちの頭の上に土をかけた」ではない。

九一 太陽神ヘリオスへの懇願は古代以来のものだが、中世でも例えば、アクリティカ歌謡「アルムリスの歌（六〇行）」に「甘きヘリオス様に誓って、甘き母に誓って、昨日、我らは何百、何千の兵を選び出した」のように現れる。

一〇〇 写本はこの次の行に「偶像の寺院で」と続くが、アレクシウは写字生の追加とみて削除。確かにイスラム教寺院に偶像が置かれるのでは矛盾している。古代のギリシャの宗教と一緒くたにされたものか？

一三七 ドゥーカス家は小アジアの有力な一族。十世紀のアンドロニコス・ドゥーカスは反乱を起こしバグダッドへ亡命、その息子コンスタンティノスはビザンツ側へ逃げ帰った。その波乱の生涯がアクリティカ歌謡「アンドロニコスの息子」や「アルムリスの歌」にも素材を提供している。

一三八 「キルマガストリ」Κιρμάγαστροι は歴史上無名の家系。シリア北西のキリキア地方の都市 Μάγαροα に接頭辞 κυρ「～氏」(κύριος「主」と同根）を付したもの、或いはセム系の語 kir「城」を付したもの、などと推測されている。

一四八 アレクシウはこの位置に移動させる。したがって、父アーロン、伯父カロエレス、祖父ムセロムは太守の一族になり、系譜の混乱が避けられる。

一四五-六 太守の親族として挙げられるこの三人のうち、父アーロン

は「アラビアン・ナイト」で有名な八世紀のカリフ、ハルーン・アル・ラシード、伯父カロエレスは異端パウロ派の指導者カルベアス（八六三年ポルソンの戦いで戦死）、祖父ムセロムは七一七年コンスタンチノープルを包囲したアラブ軍の指導者マスラハ Maslamah と同定されている。多くの学者がこれらの人名と歴史上の人物との同定を試みてきたが、しかし異論も多い。本品中でもこの箇所で一言名前が言及されるだけで、他の決め手がない。

一四九「総督」τοπάρχης。地方の支配者。

一六六 ここから一七四行までをリックスは大幅に順序を入れ替え、読みやすくしている。

娘は私に接吻を与えず、私も言葉をかけてはおらぬ。
無法なアラビア人は他にも多くの乙女を捕らえ、
無法不正にも、売り飛ばしたり、殺したりした。
貴公らの妹は私のものとなったが、
その見事な美のために、彼女を庇護してやった。
それゆえ、私は彼女を隠し、貴公らを欺いた。
　私の天幕へ行くがよい。妹を見つけることだろう。
貴公ら五人を夜昼となく待ちわびている。
行って、汚れなき乙女を受け取るがよい。

一七九「沈香」ξυλαλόη。ジンコウ（aquilaria agallocha はインド産のジンチョウゲ科の高木。辞書によっては、より小型の「マラッカジンコウ（aquilaria malaccensis）」とする。焚くと芳香を発する木として知られ、わが国にも推古天皇のころ伝わり、香道で重要な役割を持つ。

本作品の一六四三行にも現れるほか、「ディゲニスT版（一九一八行）」では、主人公の館で焚かれる香木のひとつに挙げられている。ビザンツ民衆ロマンス「カリマコスとクリュソロエ（三五四行）」や「アキレウス物語N版（八四一行）」では、風呂の釜にくべられ、薫香を放っている。いずれも嗅覚面での小道具である。

二〇八 すでにここでロマニア領に到着している。

二二一「アペラティス」απελάτης はもともと家畜泥棒の意。九世紀後半のバシレイオス一世の時代には、ビザンツ国境地帯で偵察や敵国の攻撃・略奪にあたる兵隊を指すようになった。文学作品中では勇敢な戦士のニュアンスを帯びる。「ディゲニス」でも勇猛を誇る山賊のイメージで現れ、六二二行以下で訪ねて来たディゲニスと腕比べをする。また、一一四九行以下では、ディゲニスの美貌の妻を奪おうとする。

二二三 この後はディゲニスの成長ではなく、太守の母からの手紙が続く。ディゲニスの驚異的な成長と冒険は六一〇行以下で語られる。

二二五 写本の読みのまま。アレクシウは、母親の手紙は太守の改宗がムスリム世界に知れ渡る前、直ちに書かれたはずだから、「直ちに、ほど経ずして」のような句がふさわしいと述べる。リックスもこれを採用する。

二三二-三「バグダッド」Παδά。ディゲニスG版では、Βαγδά で現れ、これはテオファネス「年代記」（四九二、十二）と同じ形である。「バスラ」Πασγρά は、アレクシウはシリア南部の町バスラと

みる（テオファネスには Βόστρα で現れる）のに対し、リックスはペルシャ湾近くのバスラと考える。

二二四 「バビロン」Βαβυλώνα。ユーフラテス川流域の古代都市。

二三六 「ハラブ」Χάλεπε はシリア北部の町。アレッポ。

二四五 「カシシ人」Κασίσιοι。11 世紀、武力でもってセルジューク朝に対抗したシーア派のひとつアサシン派（Hashishin）と同定されている。大麻を常用し、要人を暗殺した。ただし、この個所の内容は「お前の改宗を知ったら、命を狙うであろう」のような過激なものではなく、「マホメットの墓で呪いをかけるであろう」という宗教的なものであるため、ガラタリオトゥはアラビア語 hajji「巡礼者」、qissis「神官」、gazi「法官」などに由来する語ではないかと推定する。

二四六 「エメク」Εμὲκ はシリアのエメッァ、Ἐμεσα、Ἐμετζα。現在のヒムス Hims。アサシン派の拠点であった。他の説としては、メッカ Mecca あるいはアミダ Amida。「オラザヴロン」Ὀραζαβούρον は、おそらく今のダイル・アッザウル Dayr ar zawr。

二四九 この後、おそらく母子のメッカ巡礼の話が数行分欠けている。

二五六 「獄舎」φυλακάς はアレクシウの訂正。写本は φάλαγγας「軍隊の陣形」。

二五八 「イコニオン」Κόνιον は小アジアの都市（現コンヤ）。八～十世紀アラブ軍の攻撃をしばしば受けた。「アモリオン」Αμόρι はイコニオンから北西の都市。こちらも七、八世紀アラブ軍に攻められ、八三八年陥落。

二五九 「ニコメディア」Νικομήδεια、プライネトス Πραίνετος ともにマルマラ海沿岸の都市。

二六一 写本 Μουροτασίτης をアレクシウが訂正。12 世紀のカリフ Mustarshid に関連か？カロナロスは「タルソスのムスール」Μουσούρ ο Ταρσίτης（「ディゲニス T, A 版」に現れる）と同定。

二六二 「ヘルモン」、Ἑρμων 川は小アジア南東の河。「ジュゴス」Ζυγός はアンティ・タウロス山脈の峰。

二六三 「多くの悪事を働いた」サラセン人でなく、ビザンツ側の視点になっている。

二六九 「豚喰らいの娘」χαιροφαγοῦσα。豚肉を食するのを禁じるサラセン人の立場からビザンツ人を蔑称で呼んだもの。

【解説】

「ディゲニス・アクリティス」はビザンツ民衆文学の最初に位置し、現代ギリシャ文学の嚆矢とも見られている。現代ギリシャ文学史はこの作品から述べ始めるのが普通である。

しかし、この作品は写本の伝承に大きな問題を抱えており、それが翻訳の難点にもなっている。「ディゲニス」を伝えるのは六つの写本だが、原本にもっとも近いのは Grottaferrata 版（G版）と Escorial 版（E版）である。ところがこの二つが言語文体面で大きく異なるために、どちらが原本に近いのか、つまり「正当」であるのかをめぐって、長い論争が行わ

れてきた。どちらもビザンツ民衆文学の主要な表現形式の十五音節詩なのであるが、G版は古めかしい擬古体で書かれているのに対し、E版は平易な口語体で書かれている。作品中の人名や地名も微妙に異なる。

問題を複雑にしているのは、E版の写本の状態が非常に悪い点である。冒頭部分が大きく欠けており、いきなり太守とコンスタンティノスの決闘から始まる。韻文であるにもかかわらず、一行に十五あるべき音節が欠けたり、長すぎたりする行が多い。行の順番も混乱し、理解しがたい場合も少なくない。

ところが、クレタ大学のアレクシウは、一九七九年の研究書および一九八五年のE版の新しい校訂本の中で、E版の方が人名・地名あるいは歴史的事実やムスリムの習慣などを正しく伝えていることを詳論、それ以来E版の方が重要視されることが多くなった。リックスによる一九九〇年の新しい英語対訳本もE版のみを含んでいる。しかしながら、G版の価値も否定されてしまったわけではない。一八六七行のE版に対し、三八五〇行のG版はなんと言っても情報量が多いし、作品として一応まとまった体裁を持っている。アレクシウが正しいとしたE版の人名・地名に関する主張なども全て受けられているわけではない。一九九二年に「ディゲニス」をめぐる国際シンポジウムがイギリスで開かれたが、発表論文集「ディゲニス・アクリティス　ビザンツ英雄詩への新アプローチ」の中にも、G版を擁護する主張が見られ、論争は決着を見ていない。一九九八年の最も新しいジェフリーズの刊本もG版とE版の両テキストを収めている。

この作品の全貌を見るためには、やはりE版とG版の両者が必要である。

また、Trebizond 版（T版）と Athens 版（A版）はより後代のものではあるが、興味深い拡張部分を含んでいる。例えば、G版の冒頭は一三〇行余りを費やして、太守の紹介、将軍の娘の捕囚、兄たちの追跡を語るのだが、A版ではこれを三二〇行余りに拡張し、娘のいない将軍の神への祈り、奥方の懐妊、その子の将来に関する不吉な予言、娘のために建てた宮殿と庭園の壮麗さなど、ビザンツ後期の他の恋愛ロマンスに通じる描写が延々と続く。G、E版に加えて、A版（同系のT版よりも完全な形で残る）の翻訳もなされるならば、ビザンツ後期の読者の嗜好を知るのにより有益であろう。

本稿では、手始めに全一八六七行のE版の冒頭から二九一行までの翻訳を試みる。E版の写本は元来章立てがあるわけではないが、校訂者アレクシウは内容から「太守の歌」「アクリティスと山賊」「アクリティスの青春と結婚」「竜、獅子、

山賊、女戦士マクシムー」「館、庭、墓」「アクリテイスの死」の六つの部分に分けている。試訳は第一部「大守の歌」六〇九行の半分ほどである。

テキストは Αλεξίου (1985) を用い、Ricks (1990)、Jeffreys (1998) の英訳をおおいに参考にさせてもらった。

【りそまでのあらすじ】は訳者がG版の冒頭を要約したもの、【　】内の見出しも、読みやすいように訳者が付したものである。

【文献】

Αλεξίου, Στ. (1985). *Βασίλειος Διγενής Ακρίτης [κατά το χειρόγραφο του Εσκοριάλ] και το Άσμα του Αρμούρη. Κριτική Έκδοση, Εισαγωγή, Σημειώσεις, Γλωσσάριο.* Αθήνα: Ερμής [Φιλολογική Βιβλιοθήκη 5].

_____ (1990). *Βασίλειος Διγενής Ακρίτης και Τα άσματα του Αρμούρη και του Υιού του Ανδρονίκου.* Αθήνα: Ερμής.

Καλονάρος, Π. (1941: rpt. 1970). *Βασίλειος Διγενής Ακρίτας,* Β'. Αθήναι.

Beaton, R. & Ricks, D. (eds.) (1993). *Digenes Akrites: New Approaches to Byzantine Heroic Poetry.* Variorum. Centre for Hellenic Studies, Kings College London.

Galatariotou, C. (1993). 'The Primacy of the Escorial Digenes Akrites: An Open and Shut Case?' In Beaton & Ricks (1993) 38-54.

Jeffreys, E. (1998). *Digenis Akritis: The Grottaferrata and Escorial versions.* Cambridge UP.

Ricks, D. (1990). *Byzantine heroic poetry.* Bristol Classical Press.